

【研究ノート】

アクション・リサーチによるクリストファーこども園の 保育環境（物的・情報環境）に対する検討（1）

太田 雅子* 細田 直哉* 野方 円* 武田 真理子**

聖隷クリストファー大学*

聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園**

A Study to Examine the Physical and Informational Child Care Environment Using "Action Research" at Christopher Children's Center (1)

Masako OTA Naoya HOSODA Madoka NOKATA Mariko TAKEDA

Seirei Christopher University
Christopher Children's Center

キーワード：アクション・リサーチ、環境構成、大学附属園

Key Words：Action Research, Planning an Environment, Laboratory School

1. 問題・目的

保育の環境には、保育者や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、自然や社会の事象などがある。こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、計画的に環境を構成し、工夫して保育することが求められる。

保育所保育指針（厚生労働省, 2008）においては、大きく以下の4点に留意するよう示されている。①子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるように配慮すること。②子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。③保育室は、温かな親しみとくつろぎの場となるとともに、生き生きと活動できる場となるように配慮すること。④子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。

そこで今回の研究では、以上の留意すべき事柄を軸としながら、物的環境に焦点を当て、保育者たち自身が実際に保育空間の設定を行うことを通して、より良い保育環境の条件について明らかにする。

対象となるのは、2011年4月に新設された聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園の0歳児～2歳児クラスにおける実践である。おもに保育室内の環境に着目し、問題点の発見と課題解決を行うアクション・リサーチの手法で研究を行う。

また、保育においては保護者とのコミュニケーションも重要である。保育内容や子どもの様子などの情報を保護者と共有することで子どもの育ちを連携して支えられるからである。日

常の保育や子どもの様子を伝える方法など、保護者とのコミュニケーションにおける効果的な情報提示の方法についての試案を示す。

大学教員（研究者）が科学的知見を提供し、改善の手立てを保育者たちと一緒に考え具体化していく。こうした共同的作業により、こども園の保育と大学の研究・教育との相乗的な関係を構築することも本研究の目的の一つである。

2. 方法

期間：2011年10月～2012年10月

場所：聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園

1) クリストファーこども園でのアクション・リサーチによる保育における環境構成—空間構成の改善

大学教員がビデオカメラで撮影した0歳児～2歳児クラスの保育環境の映像を提示し、保育者たちとの話し合いを通して問題点を明らかにする。そこから改善の手立てを保育者と共に考案し、具体化する。さらに課題検討と改良を繰り返す中で、保育の質や遊びの変化を調査する。

2) クリストファーこども園における保護者との効果的なコミュニケーション手段の開発

保育の意図、日常の保育や子どもの様子、課題などを保護者に伝える方法、さらに保護者の悩みや意向を聴き取るための方法についてクリストファーこども園の現状を調べ、問題・課題を明確にする。その結果から情報を保護者へ伝達し共有を図るためのより効率的・効果的な方法を提案し、実践化を進める。保育者はデジタルカメラ、ボイスレコーダー等を用いて保護者と共有したい保育場面を記録し、意図・ねらいや情報内容・提示方法（園だより等）について

大学教員と共に評価・改善を行う。今回は日常の保育や子どもの様子を記録して、どのように保護者に伝えるか、どのような表現の仕方がわかりやすいのかを「園だより」「クラスだより」の作成を通して検討する。

3. アクション・リサーチとは

本研究で採用したアクション・リサーチという研究方法を最初に考案したのは、アメリカの社会心理学者クルト・レヴィンである。

学術的な研究は通常、研究対象をありのままに捉え、それを理論的に記述するものと考えられているが、アクション・リサーチを貫く信念はそれとは異なる。アクション・リサーチの特質を、それが生み出される時代背景・文化的背景をもとに明快に示している秋田（2005）によれば、それはレヴィン自身の次のような言葉に要約されるという。「書物以外のものを生みださない研究は満足なものとはいえない」（レヴィン，1954）、「理論というものは前以って体系的に詳述されるようなものではなく、むしろしばしばデータの展開につれて発展し精密化してゆくものです」（マロー，1972）。すなわち、アクション・リサーチは、「机上の空論ではなく、実際の場に根つき、さらにその場を変革していく研究、研究の進展とともにデータからさらに理論を生成展開し、実際の社会変革を生み出す研究」（秋田，2005）を志向しているのである。

そのため、アクション・リサーチにおいては「研究者の役割」や「研究対象の捉え方」も通常の研究とは異なっている。アクション・リサーチにおける研究者の役割は、研究対象である実際の現場に影響を及ぼさない、たんなる客観的な観察者ではなく、むしろ現場を変革するために、現場の実践者とともに考え、実践する

ことであり、現場を変革していこうとするその実践の過程自体が研究対象となる。

こうした方法を採用したことの背後には明確な意図がある。本研究の最終的な目標のひとつは、クリストファーこども園の環境を科学的根拠に基づき、構成・再構成していくことであるが、当然のことながら、こども園は「実験室」ではなく、子どもたちと保育者にとっての日常的な「生活の場」である。つまり、日常的に園の環境を構成していく主体はあくまでも子どもたちと保育者であり、研究者ではない。また、園の環境は一度構成したらそれで完成ではなく、子どもたちの発達や興味・関心、そして保育のねらいに応じて柔軟にきめ細かく再構成していく必要もある。

そうであるとすれば、研究者（大学教員）の役割は、みずからが園の環境を構成する主体になることではなく、園で日常的に生活する子どもたちと保育者が園の環境を継続的に構成していく主体になれるように、環境に対する気づきを促したり、環境を構成・再構成する活動を支えたりしながら、子どもたちや保育者とともに伴走することにほかならない。また、そのように、園の環境自体ではなく、むしろ園の環境を構成する保育者や子どもたちの主体性を育てるような関わりをもつことの方が結果的に、園の環境を子どもの実態に応じてきめ細かく改善していくことにつながるはずである。そのような考えから、本研究ではアクション・リサーチという方法をとっている。

4. 結果（アクション・リサーチのまとめ）

1) 空間構成の改善

0歳児～2歳児の各保育室の空間構成に着目し、単一空間のまま保育を行っている現状について、

さらに保育室が温かな親しみとくつろぎの場となると共に生き生きと活動できる場となるにはどのような空間構成が適切なのかについて議論を行った。朝の異年齢保育の時間、受け入れ時間帯（8：15～9：15）に研究者が撮影した0歳～2歳児クラスの環境の様子を映し出すビデオを視聴した後、感想や問題的について各参加者が意見を述べた。以下に話し合いの記録の一部を紹介する。

<話し合いの記録からの抜粋>

2011年10月21日

○ 朝の異年齢保育の時間、受け入れ時における子どもの落ち着きのなさについて、その原因と環境の関係について話し合う。ビデオを参考に問題点と改善方法について議論を行った。

- ・かみつき、ひっかきなどのトラブルが多い。
- ・一つの遊びに集中する時間が短い。
- ・くつろげる空間が十分に確保されていない。
- ・使わない本やおもちゃが床に散乱している。
- ・使っていない(子どもがいない)空間がある。
- ・自動車セットの新幹線とパズルの車を打ち鳴らして遊ぶ子がいるが、音を楽しみたいのなら音を楽しめるおもちゃを用意できないか。
- ・各保育室とも広い単一空間である。仕切られていない。畳コーナーで知的遊具の遊びをしようと思っても他の玩具と混ざってしまう。年齢の低い子は知的遊具があっても、本来の使い方では遊んでいない。木製パズルなどでも、打ち合わせたり、なめたりしてしまう。本来の役割を果たしていないのなら片付けておき、それにふさわしい年齢の子が使いたい時や、保育者が個別に援助できる場合のみ設定したらどうか。
- ・棚を仕切りとして使うなどの工夫はしていた

が、数が十分ではない。落ち着いて遊べるままごとコーナーを設置したい。

- ・単に好きなおもちゃを空いているスペースに持ち出して遊ぶというより、コーナーを3つくらい作り、分かれて遊ぶようにしていけたら良いと思う。
- ・廊下を乗り物などの遊びのために有効に使えるようにしていけないだろうか。
- ・現在の子どもの状態をよく観察して、発達に見合ったおもちゃを設定する。遊び方を見て、必要なおもちゃを加えていきたい。
- ・その場所で使った方がよいものは、その場所で使うよう援助・指導が必要だと思う。

2012年1月20日

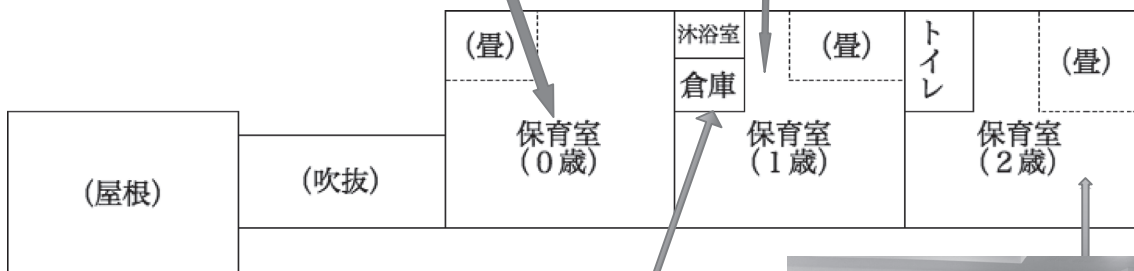
- ・かみつきなどは減ってきたと思うが、まだまだおもちゃが色々な所に持ち出されている。
- ・ままごとの道具は用意されているが、場所が囲われていないため視野が広がりすぎ、それらを所定の場所から持ち出してしまう。そのため、「見立て遊び」や「ごっこ遊び」をじっくり行っていない。また、持ち出してしまうので、本来の場所には道具がなくなり、後から来た子どもも遊べず、走り回ってしまう。すぐに、別の遊びに移ってしまい、遊びこめていない。遊びこめるような環境を作っていけないか。
- ・部屋全体が見渡せるため、大人や友だちから隠れてワクワクするような場所、子どもの好きな狭くて小さな空間がない。収納棚の扉を撤去して、下の部分のスペースを遊びのために利用したらどうか。

2012年1月27日

- ・1～2歳児のままごと「ちゃぶ台」は合わない。ままごと道具を絵本コーナーのテーブルと椅子の所へ持っていく子どもが多い。ままご



図1



改修前・収納棚



と用の椅子とテーブルを用意する必要がある。
・子どもがほっとするスペースがほしい。ソファがあれば、ほっとするスペースに置きたい。

・収納棚の扉の撤去は安全面も考え、最優先事項として考えていきたいと思う。下の部分に遊びのスペースを作れるようにしていきたい。秘密基地などになるかも知れない。上の部分は収納になるが、防災面からして、カーテンでは良くないので扉が必要になると思う。

数回に渡って話し合いを重ねる中から、具体的な物品を用意したり、工事を依頼したりするなど、空間構成を試行錯誤しながら少しずつ変化させていった。環境設定を変更していく上で

の意図とその内容を区分すると、次のようになる。①落ち着いてリラックスできる空間作り、②個々の遊びに集中できるためのコーナーの設定、③子どもの発達や興味に見合った玩具や遊具（手作りおもちゃ）の設定、④個を大事にした空間・コーナーの設定。それらの結果、保育や子どもの様子に変化が見られたと保育者が感じたり、確認したりした点を以下にまとめる。図1は0～2歳児クラスの見取り図ならびに改善前の様子を示している。

落ち着いてリラックスできる空間作り

大型クッションを用意することによって、1・2歳児クラスで長時間保育を利用している



図2

子どもたちが特に朝・夕の時間帯にクッションの上で寝転がったり、リラックスしたりする姿が見られるようになった(図2)。また、絵本などをひとりでゆったりとした気持ちで見ながら、なごむ様子も見られるようになった。

各クラスの収納棚の扉を取り外す工事を行い、上部は収納スペースとして用いるためにスライド式にした。また、下の部分には潜り込めるス



図3

ペースを作った(1歳児クラス—図3)。さらに、スペース中央の仕切りはトンネルのように穴をあけ、行き来できるようにした。

0歳児クラスの机の下に玩具をつるすなど、ひとりになって遊べる空間を設定した(図4)。囲まれた空間を作ったことで、ひとり遊びを



図4

じっくり楽しんだり、他者の目から隠れることに満足を感じている様子が見られるようになった。

個々の遊びに集中できるコーナーの設定

部屋の空間を生活・遊びの用途に合わせ、棚やパーティション、カーペット等を用いて、いくつかのコーナーに区切った(図5)。



図5

1歳児クラスには、新たな家具や牛乳パックで作成した家を置き、空間的な独立を試みたが、この空間はごっこ遊びやイマジネーション(おおかみさんの家)のコーナーとして利用されることになった(図6)。

2歳児クラスのごっこ遊びのコーナーには布



図6



図7

を吊り下げ、天蓋を作った（図7）。天井が低くなることで落ち着いた空間になった。囲まれた空間ができることにより、1・2歳児クラスとも、じっくりと遊びこむ姿が見られるようになった。守られているという安心感や自分たちの世界を楽しめる雰囲気のできたのだと考えられる。

また、各クラスともカーペットやマットを敷き、その上に異なった種類の遊び（ブロック・積み木等）ができるように設定した。つまり、それぞれの遊びのゾーンを作ったわけである。これにより、以前のように部屋中どこでも好きなスペースに玩具を持ち出して遊ぶことが少なくなった。そこが何をして遊ぶ場所なのか、子

ども自身が分かるようになったからだと思われる。また、落ち着いて遊びこめるせいか、自分なりのイメージを遊びの中で喜んで表現する様子も見られるようになった。

1歳児クラスにおいては、かみつきも減少し、保育者が子どもを抱っこしなければならない回数も少なくなったとの声も聞かれた。これは子どもが自分から主体的に遊べるようになり、一定の場所と時間の中で集中できる環境が作られたためではないかと考えられる。

子どもの発達に見合った玩具や遊具の設定

各クラスで使用している玩具を一同に集めて、玩具の特徴や発達を促すための潜在的な機能について大学教員が説明し、それをもとに話し合いを行った。それから、各クラスの担当保育者が自分のクラスの子どもに適したと考える玩具を持ち帰り、環境設定をした。玩具を色や大きさ、種類ごとに分類したり、玩具の出し方を工夫したりするなど、保育者自身に細やかに環境設定をしようとする意識の変化が見られた。さらに、探索活動を促進する玩具や、発達を促すために必要な応答性のある玩具を購入したり、保育者自身が自発的に手作りしたりするなど、保育環境を豊かにしようとする変化が見られるようになった（図8）。



図8

個を大事にした空間・コーナーの設定

0歳児クラスにおいては特に個を大事にし、保育者とゆったりと関わることができる空間構成の工夫がなされた。ベッドで仕切り、プライバシーに配慮したおむつ替えコーナーを設置した。これは個々が心地よくおむつ替えを受けるだけではなく、寝ておむつを替えることに対して抵抗のある乳児（家庭では、パンツ型のおむつを用いて立たせたまま交換している）が、このコーナーはおむつを交換する場所であると理解し、嫌がらずにおむつ替えをするようになった。（図9）



図9



図10

授乳・食事のコーナーを設置した。保育者が他の子どもに注意を向けたり、授乳されている

子どもの気が散らないようにソファの向きを壁に向くように変えた。それによって1対1で、その子どもの顔を見つめて、ゆったりと授乳する方法が定着した（図10）。

2) 保護者への情報発信・表現方法の検討

各クラスにデジタルカメラとボイスレコーダーを配布した。これにより、子どもの様子について保育者が感動したり、保護者と共有したいと考える場面を日常的に写真や音声に残すことが可能になり、保育のリアルな記録を手軽に残せるようになった。また、記録した写真は取捨選択し、記事を付け、「園だより」「クラスだより」やホームページに掲載できるようになった。その結果、保護者からは、園での様子がわかり安心できる、家庭での育児に反映できる、といった肯定的な感想が聞かれた。

さらに、保育者が作成した「園だより」の紙面への画像情報の提示方法について、より読みやすい表現方法を大学教員がアドバイスした。

各保育者がデジタルカメラを手元に置くことにより、子どもたちが活動に取り組む生き生きとした姿を撮影し、園だよりやホームページにおいて、できる限りリアルな情報を伝えられる。デジタルカメラの技術は進化し、また低価格化も進んだため、この10数年間に、専門家のみが使用する機器から家庭でも活用する一般的な機器へと変化した。また、液晶技術の進歩により、ファインダーを搭載せず、手元の液晶でのみ映像を確認する機種が増え、高解像度の一般向け機種も増えたため、保育者が保育の記録を残す手段としての有用性は格段に高まっている。それに加え、コンピュータの処理速度が加速度的に高速となった結果、画像処理技術が一般でも利用できるようになり、カメラを写す人の能力が高くなくともそれなりに“よい写真”が撮影で



図11



図12

きる。撮影した写真を表示する上では以下の点に留意することにより印象が変化する。（図11、図12、図13、図14）

写真枠を統一したり、写真の周りをぼかす等の画像処理を加えたりすることによって、園児の動きを表現でき、「お便り」がよりインタラクティブなツールと発展する可能性があるといえる。

5. 考察

環境構成を変化させるための保育者の視点（話し合いの中から）として、「落ち着く」「リ



図13



図14

ラックスする」「集中する」「遊び込む」「個が大事にされる」というキーワードを挙げることができる。それらは、個々の保育者が日常的に子どもと関わる中で、経験知として子どもの生活上大事だと考えていることが反映されている。そうした保育者の経験知と大学教員が先行研究から有効であろうと考える方法の提示をもとに、具体的に環境を変化させるアクションを起こした。

環境設定を変更する前は、畳と床の部分に区分はされていたものの、単一の広い空間であった故に、動き回る、歩き回るなど移動行動が頻繁に見られた。それに対して、柵やパーティ

ションによって空間に仕切りを設けたことにより、回遊できる空間の経路が遮断され、規模の小さな空間の中での移動になり、行動に落ち着きが見られるようになったと考えられる。またカーペットやマットを敷いた場所、机・棚やパーティションによって囲まれた空間の中に、それぞれに固有の目的ある遊び（玩具）が設定されたことは、目的とゾーン（境界）が意識化され、子どもが遊びを自分から選び、気に入った所に留まって遊ぶことに繋がったのではないだろうか。特に四方が囲まれた空間・コーナーが設定された場所では、他の遊びからの独立性を保つことができ、じっくり遊ぶ姿が観察されている。さらに、より狭い空間を作ること、その中で、他にじゃまされずひとりで居ることの心地よさを味わうことができる。マットやクッションの柔らかな感触もよりリラックス感を高めたとと思われる。

保育者は常に、日頃の子どもの様子から興味・関心が持てる遊びの設定を行う。自発的活動を促すことをねらいとしているのであるが、特に応答性のある物、その物があることによってイメージを誘発する物を設定することが自発的行動と集中力に結びつく要素であると考えられる。

個を大事にする保育は、クリストファーこども園の保育方針の中心となっている。保育者との信頼関係を築くことや、子どもの人格を大切に、幼い子どもであってもプライバシーに配慮することを念頭においた環境構成を心掛けている。保育環境を検討する上では園の方針を反映させることを考慮する必要がある。

6. おわりに

今回の研究は、子どもの行動の変化をねらっ

て保育室の物的環境を変化させて行くという試みであった。子どもの行動に変容は見られたものの、空間構成が子どもの行動にどう影響を及ぼしたかを数値化して証明することには至っていない。「落ち着く」「リラックスする」「集中する」「遊びこむ」「個が大事にされる」度合などを可視化する方法と分析によって、保育者の経験知を客観的データと結びつけて根拠を明確にしていくことが今後求められる。しかしながら、現場の保育者自身が問題点に気づき、目の前のこどもたちの姿から適切な環境構成を考えて実行に移そうという意識の向上という点においては、成果があったと考える。さらに、クリストファーこども園の保育活動と大学の研究・教育活動との相乗的な関係を構築することを目的の一つとしたが、これは開設から間もない園が、大学附属の研究機関としての役割を担うこと、研究機関との連携により学問的根拠に基づく保育の質向上を目指すための足がかりを築いた点で評価されると思う。

アクション・リサーチは「研究する人と実践する人との関係や、研究と実践活動のウェイトによって幅」があり（秋田、2005）、形式的に分類するならば、「実験的」、「組織的」、「専門的」、「エンパワー」という4つのタイプに分けることができる（Hart & Bond, 1995; ポープ&メイズ, 2001）。その分類に従うならば、本研究でのアクション・リサーチは、「保育者の潜在的な力を引き出すエンパワーメント自体」を主目的にしている点で「エンパワー」型の要素が強いアクション・リサーチであるといえる。

これは大学と附属園との相乗的な関係を築くスタート地点において、大学が指導し、附属園が学ぶという一方通行の関係ではなく、むしろ双方が専門家として自立し、共に探求し、共に学び合う双方向的な関係こそが望ましいことを

相互に確認し合う効果があったと考えている。そして、それこそが私たちが目指したことであった。なぜなら、保育とは多数の要因が絡み合った複雑な現象であり、現実の保育を理解し、その実践を改善するための理論は現場を離れた実験室でつくられるのではなく、まさに現場の中で実践者によってつくられねばならないからである。そのためには、実践者は「研究的実践者」として、研究者は「実践的研究者」として共に協力し合い、保育の現場の実践の中で研究し、理論を立ち上げ、磨き上げていく必要がある。

今後はアクション・リサーチという手法をさらに洗練させて行くことにより、保育者が経験としてわかっている事柄を対象化して、共通の課題として保育環境に関する理論を協働で作りあげる作業を継続したいと考える。今回は0歳児～2歳児クラスに絞っての研究をまとめた内容を報告しているが、3歳以上児クラスにおいても保育室環境の検討が実施されている。次稿では、3歳以上児クラスにおける実践的研究・結果の報告を行いたい。さらに、園庭や図書コーナーの環境に対しての検討を行いたいと考える。また1歳児クラスの「かみつき」が減少されたと報告されてはいるが、乳幼児の「かみつき」への対応という課題は継続している。課題解決に向けては、他園の保育現場を撮影したものを視聴して、保育者と一緒に考察する機会を持つなどの方法が考えられるだろう。情報環境に関しては、限られた情報発信スペースの中で、こどもの経験・生活やそこに見られる成長の姿を伝えるための視点（優先性等）や提示方法のいくつかを研究者から今後も現場に提供することが大事であろう。そこから保育者自身が利用しやすい方法を選んで、その技術を習得して実際化し、効果を自ら確認する手助けをし

ていくことができればと思う。さらに保護者との双方性コミュニケーションのために保育現場における有効的手段の開発を次の課題としたい。

謝辞

日々の保育実践を通して、研究に共に参加していただきましたクリストファーこども園の保育者の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

秋田喜代美 (2005) 学校でのアクション・リサーチ. 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学 (編) 教育研究のメソドロジー—学校参加型マインドへのいざない 東京大学出版会

Hart, E. & Bond, M. (1995) *Action Research and Social Care : A Guide to Practice*.

Buckingham : Open University press.

厚生労働省 (2008) 保育所保育指針

レヴィン, K. (1954) 社会的葛藤の解決—グループダイナミックス論文集 東京創元社

マロー, A.J.(1972) KURT LEWIN—その生涯と業績 誠信書房

ポープ, C. & メイズ, N. (2001) アクション・リサーチで質的方法を使う. 質的研究実践ガイド—保健・医療サービス向上のために 医学書院

参考文献

太田雅子・中島賢介・山森泉 (2003) 「園だより」
を通しての過程との連携・コミュニケーション
の在り方の考察—キリスト教保育における共に
造り出す保育をめざすために—
北陸学院短期大学紀要35

汐見稔幸・村上博文・松永静子・保坂佳一・志
村洋子 (2012) 乳児保育室の空間構成と“子ども
の行為及び保育者の意識”の変容.保育学研究
50(3)

山田恵美 (2011) 保育における空間構成と活動
の発展的相互対応—アクションリサーチによる
絵本コーナーの検討—.保育学研究49 (3)